平成２８年度　第２回　千葉県総合教育会議　会議録

日時　平成 28 年 8 月 24 日（水）午前 10 時 00 分から 11 時 15 分まで
場所　千葉県庁本庁舎５階大会議室

１　開会

〇小倉総務部長　　皆様、おはようございます。それでは、定刻になりましたので、ただいまから平成２８年度第２回千葉県総合教育会議を開会させていただきます。

私は、前回の会議に続きまして、本日も進行を務めさせていただきます総務部長の小倉でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、報道機関各社のほか、一般傍聴として３名の方が入場していらっしゃいますので御了承願いたいと思います。

それでは、初めに、本会の議長であります森田知事から御挨拶がございます。お願いします。

２　知事あいさつ

〇森田知事　　おはようございます。また、諸先生方、お忙しいところ、ありがとうございます。着席にて失礼させていただきます。

教育委員会の皆様には、御多忙の中、本日の会議にお集まりいただき、まことにありがとうございます。第１回会議では、「家庭の力の向上」を中心に様々な貴重な御意見を賜りました。心より感謝を申し上げます。

さて、去る７月２５日に県庁「子ども参観日」が開催され、私も職員の子どもたちに囲まれ、一時（いっとき）の交流を楽しみました。子どもたちにとっては、親が働く姿を目の前で見たり、家庭に戻って親と仕事について話し合うなどの経験は、子どもたち自身が自分の将来を思い描いていく上で大変重要なものではないかと改めて思いました。今回は、第１回会議と同じ「未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて」という大テーマのもとで、学校・家庭・地域の連携に焦点を当てて意見交換をお願いしたいと考えております。有意義な会議としたいと考えておりますので、本日もどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

〇小倉総務部長　　ありがとうございました。なお、恐れ入りますが、報道機関の皆様には、カメラ撮影はここまでとさせていただきますので、御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。では、進行も座って進めさせていただきます。

３　議事（１）未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて
　～学校・家庭・地域の連携による教育力の向上に向けて～

○小倉総務部長　　それでは、議事に入らせていただきたいと思います。知事の御挨拶にもありましたとおり、本日は「未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて～学校・家庭・地域の連携による教育力の向上に向けて～」を議題といたします。

　まず、具体的な意見交換に入る前に、本日の議題とも密接に関連しますので、おさらいの意味も含めまして、第１回会議の主な意見について事務局から説明をさせていただきます。

○風間学事課長　　それでは、お手元の資料の中に、Ａ３縦で「平成２８年度第１回総合教育会議　主な意見」がありますので、ご覧ください。第１回会議では、家庭の力の向上について意見交換をしていただきました。既に会議結果として会議録を作成させていただき、皆様に御確認をしていただいた上で、ホームページにも公開をさせていただいているところでございます。その会議録をもとに、皆様の御発言の主だった部分を抜き出しまして要約したものがこの資料となっております。

　第１回会議では、意見交換の切り口として、家庭・保護者向けの支援と、将来親になっていく子どもたち向けの取組の２つに分けて議事を進めさせていただきましたので、当資料の上でも、この２つの切り口に御意見を分けさせていただいております。改めてご覧いただきまして、漏れがあるなど追加がございましたら御指摘いただければと思います。よろしくお願いします。

○小倉総務部長　　ありがとうございました。ただいま事務局から、お手元の資料に基づきまして説明がありましたけれども、漏れなどがございましたら御発言願いたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。ありがとうございます。

　それでは、続きまして、知事から本日のテーマの設定理由について御発言をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○森田知事　　ありがとうございます。前回の第１回会議では、教育の原点としての家庭の力の向上に焦点を当てて御意見をいただきました。皆様の御意見の中には、同年代の子どもを育てているなど類似の環境にある親が集まる機会を、地域が主導して設ける仕組みづくりができればよい、相談窓口があっても、困っている親ほどアプローチできないのが問題。それをカバーするのが学校であり、地域とのつながりの中で学校の支援機能を高めていくことが重要であるというものがありました。

未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて、家庭のみならず、学校、地域の役割や相互の連携が重要であることを改めて認識することができました。こうしたことから今回は、学校・家庭・地域の連携による教育力の向上について、地域の役割に焦点を当てながら、さらに幅広い意見交換ができればと考えたところでございます。本県における取組を整理し、今後の効果ある取組について話し合いたいと考え、本日のテーマを設定いたしましたので、皆様の忌憚のない御意見を賜りたいと思います。ありがとうございました。

○小倉総務部長　　ありがとうございます。それでは、議事を進めてまいりたいと思いますが、本日御出席をいただいております京谷委員におかれましては、リオで行われるパラリンピックに日本代表として出場する車椅子バスケットボールのコーチを務められておりまして、この後、本日から千葉市で始まる直前合宿に参加をされます。

そこで、日程の都合上、京谷委員におかれましては、事前にお送りさせていただいた資料に基づきまして、先に御意見をいただくことにさせていただきたいと思いますので、御了承願いたいと思います。それでは、京谷委員、お願いいたします。

○京谷委員　　私ごとで途中退出させていただくということ、本当に恐縮でございますけれども、まず、今回のこの資料を見させていただいた感想と言いますか、率直な意見を述べさせていただきたいと思います。

全体的に見まして、知事部局の取組も教育委員会の取組も非常にいい取組を行っていると思っています。その中でも、資料③の（２）の地域未来塾というものですが、勉強したくても塾に行けないですとか、授業の遅れを取り戻そうにも塾に行けない、そういった経済的事情に配慮された、とてもすばらしい取組だと感じました。こういった取組を手厚くして、子どもたちの可能性を伸ばしていくことが非常に大事ではないかと思います。この事業自体が始まったばかりですので、こういったことに、どんどんいろんな市町村が取り組んでいっていただければと思います。

２点目ですけれども、これは私の本当に個人的な意見なのですが、学校・家庭・地域という連携の中に「スポーツ」というキーワードは絶対に欠かせないものではないかと思っています。スポーツというのは、年齢とか性別とか障害があるとかないとかに関わらず誰しもが楽しめるものですし、そういったものを一つのキーワードとして、学校・家庭・地域、その連携に何か生かせることができないかと思います。

今、どうかわかりませんけれども、昔は地域の中で相撲大会だったりとか、あとは運動会、そういった地域の方々の交流の場があって、私自身も昔、相撲

大会などそのような大会に出るというのが一つの楽しみでもありました。そんな中で地域のいろいろな方々と触れる機会がたくさんあって、まず、そういった顔と顔を合わせること、そういう場をつくり出していくことが一番重要ではないかと。そこから、いろいろな、これから発展していくものが見えてくるのではないかと思っております。ここまでが私の今回の意見でございます。

せっかくですので、リオの決意表明を述べさせていただきたいなと思います。

○森田知事　　どうぞ。

○京谷委員　　私自身、選手として４大会、今回の５大会目はコーチとして、立場的にちょっと違った形でパラリンピックに出場させていただきますけれども、今、選手のときとは違った緊張感を持っている状況です。日本チームの目標としましては、過去、７位が最高なんですけれども、それ以上、６位以上を目標に、現在、チームづくりをしている状況です。

２０２０年、千葉県もオリンピック・パラリンピックの会場になりますから、そういったことも踏まえ、私自身もリオで、リオの熱だったり雰囲気だったり、そういうものを感じて、２０２０年の千葉県での大会開催で少しでも力になれるように精いっぱい、千葉県の代表として会場を見てきたいなと思っております。私自身もチームのために全力で頑張ってきますので、皆さん、応援のほど、よろしくお願いいたします。

（拍手）

○小倉総務部長　　ありがとうございました。京谷委員からは、取組の実践例に対する感想とスポーツの重要性、それとリオに向けた決意表明をいただきました。ありがとうございます。

知事、それでは、都合により退席される京谷委員に対しまして、知事から一言、激励のお言葉をお願いします。

○森田知事　　京谷委員のコーチとしての力強いお話を賜りました。また、我が千葉県でもパラリンピック４競技が来ます。そういう意味で、ぜひ現場で今回、リオをしっかり見ていただいて、また、いろいろ適切なアドバイスも賜りたいと思います。どうぞお体に気をつけて頑張ってきてください。

（拍手）

○京谷委員　　ありがとうございます。

○小倉総務部長　　それでは、ここで京谷委員につきましては退席となります。京谷委員、御多忙の中、本当にありがとうございました。

○森田知事　　頑張って！

（拍手）
（京谷委員　退席）

○小倉総務部長　　それでは、意見交換に入りたいと思いますけれども、まずは、本県における関連する取組の説明から始めさせていただきたいと思います。
　まず事務局から、知事部局の取組について御説明をした後に、四街道市の齋藤様から、市民活動団体と連携した実践事例の御紹介をいただきます。
　続いて、内藤教育長から教育委員会の取組について御説明いただいた後に、流山市立北部中学校校長、中川先生から、同校を中心とした学校支援地域本部の取組事例について御紹介をいただきたいと思っております。
　それでは、初めに知事部局の取組を事務局から説明させていただきます。

○風間学事課長　　それでは、知事部局の取組について御説明いたします。座って説明させていただきます。失礼いたします。
　健康福祉部、環境生活部において関連する取組がございますが、一括して事務局から説明させていただきます。資料①をご覧ください。
　知事部局におきましては、（１）から（３）の「子育て環境の充実～子育て家庭を支える機運の醸成と地域の実情に応じた子育て支援～」、「児童福祉に係る取組の充実」、そして「青少年相談員及び青少年補導員活動への支援」を行っています。
　まず、（１）「子育て環境の充実」ですが、①から④につきましては市町村が実施する事業の費用に対する一部助成です。①「利用者支援事業」は、保護者等の身近な場所で子育て支援事業等の情報提供、相談・助言、関係機関との連絡調整等を行うものです。②「地域子育て支援拠点事業」は、地域で子育て親子の交流等を促進する子育て支援拠点における交流促進や育児相談等を行うものです。③「放課後児童健全育成事業」は、共働き家庭などの留守家庭の小学生に対して、放課後児童クラブにおいて遊び・生活の場を提供するものです。④「ファミリー・サポート・センター事業」は、児童の預かり等の援助を受けたい者と援助を行いたい者との連絡調整を行うものです。
　続いて、⑤「チーバくんを活用した子育て応援事業」では、企業から寄付をいただいた資金を財源に、高校生を対象に、「次世代を担う若者への子育て講演

会」を実施しています。⑥「子育て応援チーパス事業」では、企業の協賛を受けながら、子育て家庭優待カード「チーパス」により、子育て家庭に各種サービスを提供しています。

続いて、（２）「児童福祉に係る取組の充実」です。①「市町村児童虐待防止ネットワーク機能強化事業」では、市町村が設置する要保護児童等への適切な支援を行うための組織である要保護児童対策地域協議会の機能強化等のために専門家を派遣したり、②「主任児童委員研修事業」として、地域における児童福祉の中核的役割を担うことが求められている主任児童委員に対して研修を実施しています。

最後に、（３）「青少年相談員及び青少年補導員活動への支援」です。①「青少年相談員設置事業」として、地域での青少年の健全育成に資する青少年相談員の活動費に対して助成したり、②「青少年補導センター事業」では、青少年の健全育成、非行防止に関する青少年補導センターの青少年健全育成条例の周知啓発や有害環境浄化活動、街頭補導活動など社会環境整備活動の経費について助成し、青少年の健全育成の推進を図っています。

以上でございます。

○小倉総務部長　　ありがとうございました。

続きまして、四街道市における実践例の紹介に移らせていただきたいと思います。本日御説明をいただく「学びでつながる寺子屋コミュニティ　チームよつてら」の取組につきましては、環境生活部県民生活・文化課の表彰事業であります「ちばコラボ大賞」として、平成２７年度に表彰を受けた事例でございます。「ちばコラボ大賞」は、行政機関等と市民活動団体とが連携して地域の課題解決に取組、成果を上げている優れた事例を表彰するものでございます。

当事例につきまして、四街道市経営企画部シティセールス推進課主査補の齋藤久光様に御紹介をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○齋藤主査補　　四街道市役所の齋藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、着席にて御説明させていただきます。

お配りしております資料②をご覧ください。これから紹介します取組は、行政の仕組みでもなければ制度化されたものでもございません。高校生や大学生の自発性、主体性を尊重し、また、地域の声に耳を傾け、関係者がそれぞれの役割を適切に果たし、取り組まれている「チームよつてら」の取組を御紹介させていただきます。

「チームよつてら」は、高校生、大学生が中心となり、小学生を対象とした学習支援、体験学習を行う、いわゆる寺子屋の企画・運営を行う団体です。１ページの下の段に記載のとおり、小学生、学生、公民館それぞれのニーズや社

会課題に対して、この取組を通してアプローチしております。２ページに記載のとおり、地域における様々な主体が連携・協力して取り組んでいる事例です。

２ページの下段をご覧ください。活動の発端は、２０１２年に行政で受け入れました大学生の社会教育実習で、公民館を活用した学習支援プログラムを実施したことがきっかけとなっています。公民館の自主事業と位置づけされまして、四街道市の各公民館に広がり、その都度、ボランティアスタッフを募集し、事業を実施してまいりました。

２０１４年、２年前ですけれども、広がりある活動になったがゆえのスタッフの確保の問題、情報共有などの課題が挙がってくる中で、コアに関わっていました大学生、高校生、関係者が検討を行い、「チームよつてら」を組織いたしました。スタッフ募集の窓口機能、寺子屋事業の企画などを担う団体として活動を開始いたしました。

現在では、常設で月２回、四街道市の四街道公民館で毎月開催しております。また、夏休み、冬休み、春休みの長期休みにも寺子屋事業を実施しております。３ページ目、こちらに四街道市で展開されている寺子屋事業を記載してございます。

４ページには過去の実績、寺子屋事業に関わりました小学生、学生スタッフの実績が記載してございます。

活動の特徴を５ページから７ページに記載しております。高校生、大学生を中心とした活動をしていく中で、どう活動を当事者化していけるか、また、関わる学生が主体性を持っていけるか、また、学生においては、２年から４年といった短いサイクルで変わるライフスタイルに合わせた活動にしていくといったところに配慮を行っております。

一部、その特徴について御紹介させていただきたいと思います。６ページの下段をご覧ください。高校の校長先生に学生たちがボランティア募集のお願いに行っている写真ですが、こういった形で、この取組を通して、学生たちも貴重な社会体験を積んでおります。特徴につきましては、資料を詳しくご覧いただければと思います。

８ページをご覧ください。昨年度の寺子屋のカリキュラムを記載しております。３日間、旭公民館で行われたカリキュラムですが、学年別に分けたスタッフの企画、地域団体や学校と協力をして行った体験学習など、様々な主体と連携を図ったメニューで実施しております。

９ページをご覧ください。参加者である小学生や保護者からの学習に向かう姿勢の変化、苦手の克服などの声、学生スタッフからの、将来教員を目指したり子どもや福祉に携わる職業を目指す中での学びと経験の場になったとの声、また、地域からの、地域で挨拶ができる関係づくり、コミュニケーションのきっかけとなったとの声が届いております。

本取組の今後の課題や展望についてですが、学生スタッフという、先ほども申し上げましたライフサイクルの中でしっかりとした体制づくり、また、それらを支える行政や地域の支援、また、これからを担う、例えば中学生の参画、様々な主体との有機的な連携による必要な情報の収集や、小学生に対する情報格差をなくしていくことが挙げられております。

最終ページをご覧ください。地域には、行政の仕組みとして、放課後子ども教室、青少年相談員事業などがあり、子どもたちの居場所づくり、青少年育成に関する活動も展開されております。また、学校支援地域本部事業においても、夏休みなど長期休みに学習支援を行う活動も行われており、現在はそれらの組織との事業連携なども行っているところですが、この「チームよつてら」の取組は、学生たちが主体性を持って取り組む小学生の学習支援を通した居場所づくりでもあり、また、それに関わる学生たちの成長の場、ひいては地域活性化の取組でもあります。

最後となりますが、大人が道筋や正解をつくるのではなくて、学生たちが小学生と向き合う中で、また、地域と触れ合う中で関わる人の数だけ、いかようにも変化して、それが認められる場が地域活動の中から生まれて育まれている、こんな「チームよつてら」の取組を御紹介させていただきました。

以上でございます。

（拍手）

○小倉総務部長　　齋藤様、ありがとうございました。限られた時間の中での御説明、本当にありがとうございます。

続きまして、教育委員会の取組等につきまして、内藤教育長から御説明をお願いしたいと思います。

○内藤教育長　　それでは、私からは資料③と参考資料（１）を使って説明をさせていただきたいと思います。

まず最初に、参考資料（１）をご覧いただければと思います。「社会に開かれた教育課程」についてお話をしたいと思います。現在、文部科学省の中央教育審議会で新しい学習指導要領について議論が行われております。そのキーワードの一つが、この「社会に開かれた教育課程」という言葉です。新しい学習指導要領については、情報化、グローバル化といった急激な社会変化が今後もさらに起こっていくであろう、先が見えない未来が見えない社会の中で、今生きている子どもたちが大人になるときに、そういった見えない未来においても使い得る必要な知識と力を確実に備える、そういった学校教育を実現することが新しい学習指導要領の目指す基本的な方向になってきているだろうというよう

なことが議論されています。

このような新しい社会を見据えた学校教育を実現するためには、実際に子どもたちが学んでいることと社会とのつながり、社会でどういうことが必要になってきて、だから今、君たちはこのようなことを学ばなければいけないということを意識した教育課程が必要となってまいります。

学校は、より良い社会を学校教育を通じて創っていくというような目標を、社会と共有しながら学校教育を展開していかなければいけない。一方で、これからの社会を創る子どもたちに、そうした必要な資質・能力を育むためには、社会と学校が一緒になって教育をしていく、こういった視点が非常に重要になっていく。これが「社会に開かれた教育課程」の考え方でございます。

大変恐縮でございますが、また、資料③をご覧いただければと思います。ここの（１）の部分を、今、図も交えて御説明をさせていただいたところでございます。こうした「社会に開かれた教育課程」が実際に必要になってくるような社会を見据えて、こうしたものを実現していくために、現在、県教育委員会ではどのようなことに取り組んでいるのか、それをこれから（２）で御説明をしてまいりたいと思います。資料③の左端中ほどの（２）「学校・家庭・地域の連携による地域コミュニティの形成と教育の提供」についてご覧いただければと思います。

まず、この取組について、取組の機能に分けて御説明したいと思います。まずは、学校と家庭と地域が一緒になって教育をしていく基盤、組織をつくっていかなければなりません。①「県立学校における『開かれた学校づくり委員会』設置事業」についてでございます。県立学校については、地域住民や保護者などを委員とした「開かれた学校づくり委員会」を設置し、学校運営上の課題を地域住民や保護者の方々と一緒に検討するなど、地域に信頼される学校づくりを進めているところでございます。

一方、②は、これは小中学校も含めて取り組んでいる内容でございますが、単に運営だけではなくて、より地域のことを考えて、双方向の仕組みをつくっていくものが「学校を核とした県内１０００か所ミニ集会」でございます。学校と保護者や地域住民が様々な教育課題について膝を交えて本音で語り合う、これは千葉県ならではの取組でございます。

さらに一歩進めて、学校と地域の連携を総合的に進めていこうというものが③「地域とともに歩む学校づくり推進支援事業」、いわゆる学校支援地域本部でございます。学校と地域が一緒になって様々な取組を進めていくためにコーディネーターを配置して、そのコーディネーターを中心に、地域住民であるボランティアの皆さんが様々な取組を行うものでございます。この学校支援地域本部の具体的な取組については、後ほど、流山市さんのほうで流山市立北部中学校を中心とした取組を御説明していただこうと思います。

さらに一歩進めて、地域住民や保護者を中心に学校を運営していこうというのが、コミュニティ・スクールでございます。これは、学校に地域住民の人たちも含めた学校運営協議会を設けて、この協議会が学校を運営していこうという仕組みでございますが、千葉県では、ここにありますように、コミュニティ・スクールの設置はこれからという状況にございます。

このような様々な基盤形成のもとに、では具体的にどのような取組が行われているのか。現在、主に行われている事例を２つ御紹介いたします。

まず１つ目、⑤の「放課後子供教室推進事業」でございます。先ほど、知事部局の取組で、放課後児童クラブ、いわゆる学童保育の説明がございましたが、教育委員会では放課後子供教室、全ての子どもたちの居場所づくりを目的に取り組んでいます。主に小学生を対象に余裕教室を活用して、放課後あるいは休日に学習、スポーツ、文化活動、地域住民との交流活動の機会を提供するものでございますが、中には、補習授業であるとか勉強の取組なども行われている例もございます。

次に⑥の「地域未来塾」でございます。⑤は小学校中心の取組ですが、⑥は中学校中心で、これは昨年度から始まったものでございます。学校支援地域本部の活動の中で、家庭の事情などで学習が遅れがちな中学生などを対象に、原則無料の学習支援を行うものでございます。⑤との違いは、⑤は小学生中心、⑥は中学生中心です。また、⑤は様々な事業、⑥はどちらかというと学習が中心というような内容でございます。

次に、このような取組を進めていくためには学校と地域をつなぐ核となる人材が必要でございます。そのために行っておりますのが、⑦「学校支援コーディネーターの育成」でございます。県では、学校支援地域本部等の関係者を対象に研修を実施して、コーディネーターとして必要な知識や技術の習得、資質の向上、ネットワークづくりなどを図っております。

以上申し上げましたのは、基盤形成と、それをもとに、子どもたちの様々な活動に対する支援というような取組でございますが、学校と地域とのつながりは、さらに別の角度の取組も進めるようにできるものもございます。それが、（３）の「家庭や子どもたちの様々な課題に対応するための学校・地域・関係機関の連携」、資料③の右に書いてある内容でございます。

家庭や子どもたちの様々な課題に対応していくためには、前にも申し上げたかと思いますが、学校あるいは学校の先生だけでは限界が来ております。今申し上げました様々な基盤も活用しながら、学校が地域や関係機関との連携を進めて取組を図っていく必要があるかと思います。

①の「スクールソーシャルワーカーの配置」は、そのために重要な役割を果たすものでございます。点線の中に対応事例が書いてございます。詳しくは申し上げませんので、後ほどご覧いただければと思いますが、この事例にありま

すように、社会福祉などの専門的な知識を持つスクールソーシャルワーカーを県が配置することにより、学校と児童相談所、あるいは市町村の福祉機関、警察、医療機関などの関係機関と学校をつなぎ、あるいは民生委員とか地域の方々などの支援も得ながら、各機関の強みを生かして、児童生徒、その保護者を支援していくものでございます。

次に、②の「学校・警察連絡協議会」でございます。これは、学校と警察が相互に連携し、補導センターや市町村教育委員会などをメンバーに加えた協議会ごとに、地域の非行防止、生徒指導、安全対策、この安全対策というのは防犯もありますし交通安全もございますが、こういったものについて取組を行い、情報交換を行い、あるいは研修会なども実施していくものでございます。こうした青少年の健全育成、安全などの取組は、地域との連携のもとに進めることがさらに効果的になると考えているところでございます。このような関係機関との連携を進めながら、地域と連携をして、子どもを支えていく体制づくりをさらに進めてまいりたいと思います。

最後に、冒頭に御説明しました「社会に開かれた教育課程」の考え方を生かして、実際に取組を進めている実践例を御紹介したいと思います。また、参考資料（１）に戻っていただければと思います。この参考資料（１）の裏面をご覧いただければと思います。

まず、社会に開かれた教育課程ということで、地域と総合的に結びついて様々な取組を行っている事例は、この後、流山市の北部中学校区学校支援地域本部について御説明をいただこうと思います。これが非常にわかりやすいと思います。ただ、高校となると、また少し違うと思いますので、県立高校の実践例をここでお示ししました。東葛飾高等学校では、本県の医師不足という実態を踏まえて、将来の地域医療を担う人材の育成を行うため、医歯薬コースを設置いたしました。もちろん医者となるために、あるいは看護師となるためには、大学等の専門機関で教育を受けて免許を受けなければいけないわけでございますが、そういった大学とか専門学校とかに進学するための、意欲や目標意識を育てようというものでございます。

この医歯薬コースは、柏市医師会の指導と千葉大学、柏保健所並びに国立がんセンターなどの協力で実施されておりますが、中でも柏市医師会という、地域医療を担う組織の全面的な支援を受けているものでございます。まさに地域のニーズを踏まえて、地域と連携して医療従事者を目指す意識を醸成する仕組みとなっているところでございます。高校段階においては、今後このように地域ニーズを踏まえて、地域の関係者、地域の専門家と連携した取組がますます重要になってくると思っております。

以上で私の説明を終わりますが、県教育委員会といたしましては、今後、より一層、学校、家庭、地域の連携を図り、社会ニーズを踏まえながら、社会の

人材を活用した取組を進めることで、未来を担う子どもたちの健全な育成を進めてまいりたいと思います。今後、どのような効果的な取組が考えられるか等、御助言をいただければと思います。
　私からは以上でございます。

○小倉総務部長　　ありがとうございました。
　続きまして、ただいまの御説明の中にもありましたが、「流山市立北部中学校区学校支援地域本部の取組」を御紹介いただきたいと思います。この取組は、地域の方々による優れた学校支援活動として、平成２６年度に文部科学大臣表彰を受賞されております。当事例につきまして、流山市立北部中学校校長、中川淳先生に御紹介をお願いしたいと思います。

○中川校長　　こんにちは。流山市立北部中学校の中川と申します。よろしくお願いいたします。座って説明させていただきます。
　それでは、本校中学校区学校支援地域本部について説明させていただきます。時間の関係上、全ての取組を御説明できませんが、本会議のテーマが「未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて」ということでありますので、地域の方々と子どもとの関わりを中心に説明させていただきます。詳細については資料④をご覧ください。
　まず、本校の地域本部は平成１９年度に立ち上がり、今年度で１０年目を迎えます。立ち上げ当初は何をどのように進めてよいか手探り状態でのスタートでしたが、現在では本校の元ＰＴＡ本部役員や各小学校でＰＴＡ活動に携わってきたコーディネーター３名が中心となって、約１３０名に上るサポーターを取りまとめております。北部中学校区の２校の小学校を含め、学校の様々な活動を支援してくれております。
　主な活動内容として、学力向上関係、読書・図書室関係、キャリア教育関係、学校環境整備関係、その他となっております。
　次に、特徴的な取組をいくつか紹介させていただきます。１つ目は、算数・数学サポートです。これは、地域で算数・数学を教えられる高齢の方々や本校の卒業生などにサポーターとなっていただいているものですが、小学校では１５分間の朝自習の時間に算数の丸つけ等をしていただいております。間違ったところは、その場で簡単にやり方を教えるなどして、基礎・基本の定着を図っております。
　また、中学校では、月に２回程度ですが、部活動を行わない日の放課後に学年別の数学補習を行っており、基礎・基本の定着に課題がある生徒はほぼマンツーマンで教えていただいております。授業中だけではなかなか補い切れない部分を少人数で丁寧に教えてくださるので、生徒たちにとっても有意義な時間

となっております。

２つ目は、英語検定の二次面接の練習です。英検では、御承知のように、中学校卒業程度の３級で、二次試験に英会話による面接があります。生徒にとって初めての経験で、とても緊張する試験ですが、地域の中で、外資系の会社に勤務経験がある方や海外生活の経験がある方、流山国際交流協会で活動されている方などのサポーターさんが面接官役になって、試験本番を想定した模擬面接を行ってくれております。そうしたことでイメージをつかむことができて、落ちついて試験に臨むことができております。日常接している英語科の教員ではないサポーターだからこそできる支援だと考えております。

ちなみに、塾等ではなく、昨年度、学校で英語検定を受検した生徒の中で、英検３級以上の二次受検者は８６名で、そのうち４４名が合格と高い合格率でした。

３つ目は、様々な授業のサポートです。長年書道に携わり師範の資格を持っている方に国語の書写の補助に入っていただいたり、現役の保護者の方にサポーターとして家庭科の授業のミシンの補助に入っていただいたり、キャリア教育の職業人講話の講師になっていただいたりするなど、授業の中でより多くの指導者がいたほうが生徒たちにとって学習効果が高いと思われる内容についてサポートしていただいております。

他にも、学校のニーズに合わせて、コーディネーターがサポーターを募集し、地域の人材を発掘してくれるので、学校としては非常に助かっております。１０年目を迎えて、本校地域支援本部は安定した取組が行われていると考えています。成果としては、市内だけを見ても、他地域に比べ、地域人材が学校に関わる機会が非常に多いと思われます。私の学校経営方針の目指す学校像として、「地域に支えられ、地域を支える学校」を掲げておりますが、まさに地域人材が本校中学校区の教育の一端を担っていると考えております。特にコーディネーターの役割は非常に重要で、学校と地域人材の橋渡し役としてなくてはならない存在となっております。

また、課題としては、学校が求めている支援とサポーターの思いとのギャップを埋める、そういった調整です。学校とコーディネーターとの意思疎通が大切だと考えております。

以上で説明は終わりますが、１年間の活動の様子を、資料④の後の「学校支援地域本部便り」、年間４回、５回出していただいておりますが、そこに昨年度のものをまとめてありますので、ご覧いただければと思います。

以上で説明を終わります。ありがとうございました。

（拍手）

○小倉総務部長　　ありがとうございました。中川先生、限られた時間の中でのご説明、ありがとうございました。

それでは、ここまでの知事部局、あるいは教育委員会、さらには実践事例の紹介なども参考にしていただきながら意見交換に入らせていただきたいと思います。ここまでの説明につきまして確認したいことがございましたら、御意見の中で併せて言っていただければと思います。

それでは、御自由に御発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

では金本先生、お願いいたします。

○金本委員　　御説明ありがとうございました。今、市の行政、小中学校、これらを中心とした力強い取組の事例を発表していただき、本当にすばらしいなと感じました。このことが、今後、県全体に、それぞれの地域の特色を生かしながら広がっていくにはどうしたらいいのかなということを考えておりました。文部科学省の補助事業となった後で、その後もその取組が続いていくようにすることも大事ですし、そういったことを考えたときに、地域というものをどう捉えたらいいのかということをちょっと感じました。

私の考えでは、小学生の立場、中学生の立場からすれば、学校の学区、これがまず地域のミニマムなものであると。それから、高校になりますと、その地域の概念はもっと広がってまいります。しかし、個々の家庭にとっては、例えば就学前の子育てについては、その親御さんの活動する範囲が地域である。地域というのには、使い方によって様々な範囲の違いがある。このことを前提にした上で、そして、地域というものの支えがなければ子どもは育っていかないことに着眼しまして、今日のテーマ、これについて３つの視点から考えてみたわけでございます。

一つは、地域が今のままでいいかどうか。地域をつくり出していく、人づくりの中に地域がつくられていかなきゃいけない。地域創生とも言われていますけれども、地域そのものの活性化を図る。二つ目が、学校教育から地域との連携を考える。三つ目が、子どもの将来を考えたら、キャリア教育、この視点から考えていくべきだと感じました。

１点目の地域づくりなんですけれども、例えば、防災であるとか防犯、こういったものに対応していく。この場合に、地域と学校が一体となった避難訓練、これはもう３・１１の例を取り出すまでもなく、これからの大事な取組だと思います。全国でも、子どもたちがそうした中で、自分の地域マップをつくっていくという取組がよく報告されてきました。つまり、子どもたちが、大人が言うようにただ動くのではなく自分が考えていくという、そういった機運を高める中で、人づくり、これを進めていく。そうした中に、地域というものをつくっていく力が湧いてくるのではないか。私は、このことを非常に大事にしたい

と思います。つまり、子ども参加の地域づくり、この視点を置いておきたいと思います。細かいところ、時間があったら、また申し上げたいと思います。

２点目の学校教育の視点ですが、学校というのは本来、地域の文化伝統の中心であったと思います。また、その意味で人づくりの重要な場でもある。しかし、現代の学校の問題として、親御さんや御家庭や地域が子どもたちの様々なしつけ、育成を学校任せにしているという傾向が強過ぎる。ここのところを地域自体が反省をして、学校が何を目指しているのか、どんな資質・能力を育てようとしているのかをよく知り、共有していく地域であってほしい。そのためには、学校も努力しなければなりません。

このときに一つ大事なのは、学校の構成員である教師は必ずしもその地域で生まれ育った人ではないということです。つまり、教師は様々な地域を渡り歩いていきます。そうした中で、その様々な環境に適応しながら教師も成長している姿があります。そのことを地域が理解し、学校の先生と地域の方々が共有すべきものを共有していく連携協働、これをしっかりやっていく。その中で地域は何ができるのか。地域に潜在的に備わっている力、伝統文化の力、あるいは技(わざ)の力、あるいは、そこにある企業の力、こういったものを地域の力として組み込んでいく地域であってほしい。住んでいる人たちだけの気持ちではなく、その昼間の地域も非常に大事なんです。

ちょっとここで余分な話をしていいでしょうか。私は新宿区に住んでいるんですね。週の大半、実は西千葉で１人で住んでいるんです。そうしたときに、昼間は人口が多いんだけど、夜になるとその人口は減るんです。つまり、遠くから通ってきて、そこで仕事をしている。でも、夜は自分のねぐらに帰っていく。そのベッドタウンとしての地域もあれば、昼間働いている人たちが多くいる地域というものもある。地域には様々な顔があるんです。そういったものを学校がどう受けとめ、子どもの育成とどう結びつけていくか、これはよっぽど考えていかなきゃいけない非常に大事な問題だと私は思います。都市部にあるところや、そうではない自然豊かな地域、これが混在したのが約６２０万の人口を持つ千葉県ですので、そういったことをしっかり考えていく必要があると思います。

３点目のキャリア教育です。これは、子どもは宝であるということを前提に置かなければなりません。少子化、高齢化、今後ますます進んだときに、一人一人の子どもは皆大事なんだという気持ちを持って、子どもたちの将来、これを学校任せにしないで、地域の人々で一緒に考えていくという、このことを実現するにはどうしたらいいんだろうか。このことを考えたときに、子どもがこの地域で生きていきたいんだという魅力ある地域づくりをすること、これは絶対大事です。

それから、様々な生き方ができるんだよということを地域が子どもに発信で

きるようにすること。これは、将来こんな仕事もあるということも含めて、地域の責務であろうと私は思います。そうしたときに、ボランティア活動であるとかインターンシップ活動というのは生きてくるだろうと思っております。

ちょっと長くなりましたけれども、このような意見を持っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○小倉総務部長　　ありがとうございました。金本委員からは、地域づくりなどの地域に着目した３つの視点から御意見を頂戴しました。ありがとうございました。続きまして、佐藤委員、よろしゅうございますか。

○佐藤委員　　私は今回、「学校・家庭・地域の連携による教育力の向上に向けて」というテーマ、地域の役割に焦点を当てるということは、地域が現代の子どもたちやその親世代にとって非常に今日的であり重要ということと受け取りました。そのもとは、やはり経済的、国際的な状況が安定しない状況ですから、先を見通しにくい現在、学校も家庭もそれぞれ精いっぱい子どもたちを育てることに力を注いでいるわけですが、それで十分に満たされる子どもたちと、一人一人の状態、状況により、また、家庭の状態からも周りからの助力を傾注する必要がある場合も少なからずあるようです。そういう場合、今回の「チームよつてら」の紹介からは、地域で行う学習支援だけではなくて、体験学習のプログラムが充実しており、より子どもたちの力になると考えられます。

また、参加する高校生、大学生にとっても、兄弟が少ない現代、このプログラムに参加することで、自分たちも少し子どもの部分が残っているんですけれども、今の子どもたちに接することで経験がより豊かになると思います。そういう意味で、どのようなボランティアにも共通しているかと思うんですが、サポートを受け取る側とサポートする側は双方がお互いを育てるという意味で重要だと思います。

今日の発表をお聞きして、ちょっとだけ気になった点があります。話がちょっと飛びますが、今回オリンピックで柔道男子が全種目メダルをとったわけですけれども、これは各選手、あるいは応援のたまものだと思うんですが、それとともに、監督のやり方が非常に違っていると聞いています。前の監督の方はかなり自主性を尊重してということで、今回の井上康生監督は自主性を尊重しつつ、きちっと伝えるところは伝えるというような、それから、よく研究するというようなところも聞いております。

やはり地域でやっていく上で、さっきの金本先生の話とも重なるかと思うんですが、高校生、大学生も２年、３年で交代していく。それから、市の職員の方もやはり何年かで交代していく。そうすると、私のようなシニア世代のボランティアが結構長く地域にいて、そこで支えになっていくのかななんて考えて

いまして、それとともに自主性を尊重しつつ、どういうふうに学生たちによいアドバイスなどを与えていけるのかということが継続する力になるのかなと考えておりました。

教育委員会からの取組について流山市からの報告をいただきまして、子どもたちの学習支援だけではなく、資料④の最初の「学校支援地域本部便り」の平成２７年９月１６日発行号に、４月２３日と２４日、小学校と中学校の家庭訪問でタイ人の保護者に対し通訳サポーターさんが同行していただいているというような報告がございます。これは、これからいろいろな国の出身の方が日本で活躍する時代かと思い、非常に重要な取組だなと感じました。私たちが教育委員として視察した際も印象に残っていますのは、高校年代になって、お母様がよく日本語を理解されないために、中学は何とか卒業はしたのだけれども、内容を理解しないまま高校にという例もお聞きして、やはりこういうサポートって非常に重要だなと感じております。

私も、今までやってきた仕事の中でも、やはりよくわかっていらっしゃる通訳の方がいるといないでは保護者の方たちの理解の仕方が違うので、是非これはいろんな地域でもだんだん増えていくと、そして継続的にできていくといいなと思っております。

それから、知事部局のいろんな報告を聞いて、子育て環境の充実、児童福祉の取組などがやはり年々充実しているという印象を受けております。その中に、専門的人材の確保が困難な市町村に専門家を派遣するということがあります。これも視察でいろんな地域に伺わせていただきますと、人口が減少している地域もあって、その中で皆さん、苦労しながら一生懸命やっていらっしゃいますけれども、やはりそういうときに専門家を派遣してもらうというのは子どもたちにとって非常に力になるだろうと思われます。ぜひこれもさらに充実していただければと思います。

それらとともに、必要な人たちには妊娠中からの継続的なサポートも重要だと思っていまして、それらが子どもたちにも親にとっても大きな力になっていくと考えております。よろしくお願いいたします。

○小倉総務部長　　ありがとうございました。佐藤先生からは、「チームよつてら」、それから「流山市立北部中学校区学校支援地域本部」、あるいは事務局の取組等々に対する御意見、御感想をいただきました。どうもありがとうございました。続きまして、上西委員、お願いできますでしょうか。

○上西委員　　それでは、私からお話をさせていただきます。今回のテーマ設定を改めて考えてみますと、子どもは本当に大きく、そして広い可能性を持っているということ。それを花開かせるためには何が大切かというと、やはりし

っかりと適切な学びをしていかなければ、すばらしい大人にはなっていけないのだろうと思います。幼児期、小中高、それぞれのライフステージの中で、児童を取り巻く保護者、あるいは先生、地域の方々などからの影響が、子どもが大きくなっていく中でいかに大切かということ。このことは本当にほとんどの方がしっかり理解、認識をされていることだと思っています。

そういった中で、今回、人材という視点からお話をさせていただきたいのですが、まず、取組について、今回の資料を読ませていただきまして、知事部局、教育委員会の施策は非常に広範囲であり、またきめ細かく取組、仕組みというものも設定されていまして、千葉県の教育に対する力の入れ方、情熱は本当にすばらしいということを改めて感じたところです。

一方で、こういった取組がさらに実効性を高めていくため、あるいは推進されていくためには、若干予算の話とも絡むのかもしれませんけれども、やはり関わっていく地域の住民の方、あるいは専門家、児童の成長の手助けをする、そのような人材のストックが必要になることは、言うまでもないことだと思います。学校の先生方は本当に日常の児童への指導等でかなり手いっぱいであることも認識されております。また、現状も児童委員、相談員、コーディネーター、ソーシャルワーカーや、「チームよつてら」、あるいは「流山市北部中学校区学校支援地域本部」の活動のように、ボランティア等の方々に大変な御尽力をいただいて児童の成長をサポートしていただいているところですけれども、改めてこれから先を見ていくと、社会情勢はもっともっと変わっていくのだと思います。また、児童を取り巻く環境、あるいは児童の直接的な環境、例えば経済的な面も含めて、児童一人一人を取り巻いている環境がいろいろと複雑化していくことがあると思います。

本来教育が大事にしている一人一人の児童の個性といいましょうか、これから大人に向かって何をしていきたいのか、そしてそれをしっかりと伸ばしていくという、サポートする機能がもっともっと強くなっていかなければいけないのではないかなと思います。

そういった中で、このようなことをサポートする人材の発掘、育成、こういったものも現状でも力を入れられているところは理解していますけれども、一方で、今、世の中のいろんなことへの関心、教育というものに対する関心を持っている人も随分増えていると思います。例えば民間企業の中でも、今、ＣＳＲに関するいろいろな活動をしていく中では、教育の問題もあるし環境の問題もあり、そうした視点や考え方を持った人がたくさん出てきています。若くなればなるほど、そういう方が増えていると私は感じておりますので、これからそういった方々にどういう形で、子どもの成長をサポートしていただけるか、そういう活動に関わっていただけるような人材を、組織としてストックをして、もっともっと活動していいただけたらいいなと思います。こうした活動が活性

化することで、子どもに健全に成長してもらうための地域との連携という部分も、ある側面からは実効性が伴っていくのではないかと思います。児童にとってもいいですし、あるいは会社をリタイアした方々がそういった中で地域貢献しているということで、その方の人生にとっても非常に充実するということで、非常に有意義な形にもつながっていくのだと思います。

それから、今回の「チームよつてら」、それから「流山市立北部中学校区学校支援地域本部」の活動についても、これも本当にすばらしい実績だと思います。今お話しさせていただいた人材の部分についても、本当にしっかりと、そういった方々が活躍されているのを感じたところでございます。

それから、また一方で、児童の視点からです。いろいろな活動に参加している子どもたち、児童がいっぱいいるわけですけれども、参加するのは、どちらかというと行動的あるいは積極的な前向きな子どもたちが多いと思います。全員というのは非常に難しいとは思いますけれども、参加したいと思っていても、ちょっと引っ込み思案で参加できない子もいると思います。そういった子どもたちも、将来に向かって大きく羽ばたいてもらいたしですし、そのきっかけづくりになってもらいたいので、そういった子どもたちももっともっと積極的に参加できるような仕組みを何かつくっていただけたら大変ありがたいなと思います。

いずれにしましても、このような活動の重要性とその理解、効果などの創出のためにも、施策の深掘り、それと実行を期待しているところでございます。本当にすばらしい活動をされていると思います。以上でございます。

○小倉総務部長　　ありがとうございました。上西委員からは、地域における学びをサポートする人材の重要性、ストックの必要性、あるいは児童の活動等に参加できるきっかけづくり等々につきまして御意見を頂戴しました。ありがとうございました。続きまして、井出委員、お願いいたします。

○井出委員　　私は先ほど、知事部局並びに教育委員会の取組を聞いて、まず、教育委員会の「放課後子供教室推進事業」、「地域未来塾」、それから、知事部局の「放課後児童健全育成事業」、こういうものは非常に大切であろうと思いました。これをさらに進めていくために一つの提案をさせていただきたいと思っています。

まず、教育委員になってまだ日が浅いのですけれども、注目している言葉があります。それは、「千葉の潜在能力を生かす」という言葉であります。その潜在能力を生かすことによって、その地域にふさわしい教育を展開することができると思っています。そこで、潜在的な教育力の向上ということについて、地域というものはどう関わっていけるだろうか。これについて申し上げたいと思

います。

まず、地域には歴史的に育まれた有形無形の文化財があるわけですし、その土地の住人が織りなす実業界、また多彩な行事を展開する精神的な風土があります。それを教育の場に生かすことが、千葉の潜在能力を生かした教育立県の土台づくりの課題であると考えています。その地域に根差す潜在能力の一つとして、県内にある大学及び大学生の多彩なパワー、これをもっと活用してはどうだろうか。実は、先ほどの「チームよつてら」並びに流山の報告を聞きまして、それが徐々に始まっていることを実感しております。大学は、それぞれに建学の精神があって教育活動を展開しているわけですけれども、私が注目したいのは、各大学が共通して掲げている、社会貢献を展開する「地域に開かれた大学」というテーマであります。大学の社会貢献、あるいは地域貢献といった場合には、その主体は学生のパワーであるわけですが、学生の社会貢献への努力、これは学生を教育する上で非常に重要なものになっていきます。特にキャリア教育の上では非常に重要な課題となります。

そこで、各大学は社会貢献を課題とする正課の授業、さらに課外活動など実に多彩なプログラムを展開しております。特に東北の震災以来、被災地のボランティア活動のみならず、国の内外を問わず、児童・生徒の支援、特に学習支援、体験学習、そういう課題に学生の関心が非常に高まっています。

各市町村が大学と提携して、大学の活力を生かして独自の展開をすることもできると思います。また、大学祭などの行事を地域に開かれたものにすることによって、地域の児童・生徒の参加型の大学行事も可能であります。あるいは、県内には、凡そ５，５００人という多くの留学生がいます。この留学生たちを活用して、語学学習の場を作ることは十分に可能です。単に語学の修得ということに限らず、留学生との交流によって異文化の体験も出来ます。既に実際行っているところがあります。このように、地元の学生、それと地域の児童・生徒、これが交流することによって、千葉の教育力というものは確実に道が開けていくだろうと思っております。

県内各地に広大な敷地と充実した施設、あるいは設備を有する大学があるわけです。そこに学ぶ多くの学生のエネルギーを、地域に芽生えた千葉の潜在能力として、学校、家庭と連携させることによって、より体系的な高等教育機関との連携というものが実現し、本県の教育力のさらなる向上が実現すると考えております。

○小倉総務部長　　ありがとうございました。井出委員からは、大学と学生と地域の関わりにつきまして、県内大学の現状を含めたお話、そして、千葉の潜在能力との関わり方等につきまして御意見をいただきました。ありがとうございました。

それでは、これで一通り、委員の方々、先生方からはお話を頂戴いたしました。これ以外に、全体を通して等、何かございますでしょうか。よろしゅうございますか。ありがとうございます。

それでは、議事には、「その他」が用意されておりますが、特にございませんか。それでは金本先生、お願いします。

○金本委員　　本日のテーマに係る意見ではありませんが、こうして知事部局と教育委員会の取組を共有できる場となっているのは、私はすごく気持ちがよくて、実は教育委員も教育長も全国連合会というのがあって、全国の各都道府県の取組もよく報告されています。少しお聞きしますと、こんなに広がりのある、きちっとした方向性を持った総合教育会議はないなと、今、自負をしたところでございます。

そういったことも踏まえて、もしもできますれば、今後こうした議論、我々が意見交換している中の一つでも二つでも、さらに具体化していくような形ができるといいなと。そういう意味で、次回の第３回目には、学校・家庭・地域、今度は全体の連携についてまた議論ができるとすばらしいだろうなと、今感想を持ちましたものですからつけ加えさせていただきました。よろしくお願いします。

○小倉総務部長　　ありがとうございます。いただきました御意見、十分に参考にさせていただきながら、引き続き進めてまいりたいと思います。

それでは、時間もちょうどいい時間となったようでございます。協議につきましては以上とさせていただきますが、知事から御感想等も含めて、お言葉をいただければと思います。

○森田知事　　ありがとうございます。大変貴重な御意見を賜りました。「チームよつてら」、流山の取組について、子どもたちのために、本当にこれからもしっかりやっていただきたいなと思いました。

それと、もう一つ、上西委員がおっしゃった、要するに、積極的に参加すること。ところが、やっぱり１０人のうち２人か３人ぐらいは消極的になって、何となく出ない子もいるわけですね。だから、積極的な子に対して私たちは一生懸命行う、もちろん一番大事ですよ。でも、今度はそういう子、言い方は悪いですけど、そういうところから落ちこぼれた人たちもどうやっていくかと考えるのもまた、これはもう一つ、私たちが知恵を絞らなきゃいけないところかなと、そう考えるところでございます。

私は以前、森田塾のことを話したことはありましたか。

○金本委員　　いえ。

○森田知事　　そうですか。実は私、俳優の頃、あるテレビに出たら、若者の相談のコーナーがあったんですね。そうすると、ある子は、「みんなといると私は一緒になって笑うけど、心から笑ったことがない」と言うんですよ。みんなが笑うから笑っているんだというような意見だった。私は孤独だと。そういうことがあったんですよ。私は当時から、子どもたちにはもっともっと明るく元気でという気持ちを持っていたものですから、「よし」と。こういう子たちに、一人でも二人にでも明るい気持ちを持たせたい。みんなと一緒にやるのは楽しいよということをさせたいなと私は思ったんです。でも考えてみたら、これは私が俳優であり、テレビを使ったからできたことなんですよ。それで当時、自分の歌の「さらば涙と言おう」という曲名から、「さらば孤独と言おう会」という名前を付けて、「みんな、集まれ」とやったんです。テレビで訴えかけたんです。そしたら何と、関東全域で５,０００人ものメンバーが集まってきたんです。私も驚きました。

そして、あるテレビ局の深夜に生番組で、「よし、みんな集まれ」と言ったら、何と３００人ぐらいテレビ局に集まってきて、大騒ぎして、そうしたら、パトカーまで来ちゃって。近所の人が、何か変なやつが集まって何かやっているというので。そのときは冬でしたから、寒かったですよ。でも私はセーターを脱いで、「おーっ！どうだ。何が寒いんだ、おまえ。俺がこれでどうだ。何とかしてやろう！」、そんな勢いでやっていました。そして、それから、私は年に１回、実は森田塾という合宿をやったんです。八ヶ岳だとか伊豆だとかでやりました。

そのときにはどういうことをやったかというと、もちろんテレビを使って訴えかけて、「家族でみんな来いや」と言って集めて、参加者をそれぞれのバンガローに分けたんですね。そして、家族で来た人は絶対家族同士を一緒にさせないんです。みんな、知らない人と一緒にする。５０代の人もいるし４０代の人もいるし小学生もいるんですよ。そういうように５、６人ずつ、みんなチームに分けたんですね。そして私は、みんなの顔を見回して、小学生、中学生ぐらいだったかな、何か暗い子がいるんですよ。「よし、君だ！　よし、君はな、Ａの６のメンバーだろ。なっ。君が班長だ」と。するとその子は「班長？」と。「そうだよ。これ、鍵渡すからな。わかるか。明日、食事は何時、それから、こうしてこうして。お風呂はどうやって入るかは君が決めろ」と、こうやったわけですね。そうしたら、何しろ家族で来てもバラバラな組み合わせですから。みんな、世代によって分けたんですね。

そうすると、そこで何が狙いかというと、私なんかもそうでした。小さいとき、あんまり身近な人の意見というのは、特に親から言われると、「うるせえな」と、こうなっちゃうものでございます。でも、知らないおじさん、知らないお

ばさんや自分より上の高校生や大学生の人は、まず、とりあえず、みんな集まってきて、どうしようかというときに、いろんな話をしていると、意外と子どもというのは、そこで、ふっと、「あっ、そうか」、「あっ、そうか」と考えるんですね。そして、明くる日、塾生がそのときは３５０人ぐらい集まってバス７台ぐらいで移動するんですが、昨日まで全然元気がなかった子どもが鍵を預けに来て、「塾長！」と俺の所に来るんですよ。「あっ、どうした。元気だな、おまえな」と言ったら、「塾長、この森田塾というのは面白れえな」と言うんだ。「面白いなって、おまえ、何でこんなに元気になったんだ」と思って聞いたら、「うちにいたら、お風呂に入るのはいつも俺が１番なんだ」「おお、そうかい」「でも、ここは違う。みんなでじゃんけんして、そして入ったんだ。それで、みんなで決めて、１人５分以内だと。僕が全部、この５分を計って、それでみんなを入れたんだ。いや、面白い」と。何か当たり前のようなことでも、面白いと言う。彼にしたら、ものすごく素晴らしい体験だったんです。うちにいれば、何食べたいと言えば、すぐ出てくる、お風呂入りたいと言えば自分が先、寝たいと言えば自分が先、こうなっている。でも、ここでは、集団というのはそうじゃないんだよ、ということを彼は学んだんですね。

私、それから毎年、５、６年やりましたかね、森田塾の合宿を。あと、伊豆急で、「青春号」というのをつくりまして、プレートを「青春号」と書いて、それで伊豆急を走らせた、下田を。そういうふうに、私の場合はたまたま俳優でテレビを使ったから、それで全く興味ない子どもでも何となく、「何か、面白いかな」と思って集まってくれた。それがワイドショーだとかでどんどん、どんどん流れれば、みんな、そこで、言い方が悪いですけれども、拾われたというか、そういう人たちを１人でも２人でも３人でも拾うことはできたなと。それと同時に、この子たちが協調性を身に付けて、お父さん、お母さん以外、お兄ちゃん、お姉ちゃん以外の人の話をちゃんと聞くことができたということは、たとえ１人でも、その子の人生においてプラスになればいいなというような思いで、当時、森田塾というのをつくったんでございます。

ですから、今日発表のあった子どもたちの育成の取組、あれはすばらしいです。あれはどんどんやっていきましょう。それと同時に、もう１班ぐらいつくっておいて、さっき京谷委員が言ったように、相撲大会だとかベーゴマ大会だとか、地域の芸人みたいなお兄さんに旗を持たせて、みんなで砂浜を一緒に走ろうじゃねえかとか、そういうことをやって、そういうネガティブな子たちを引っ張り上げる作業というのも、別班でつくっても面白いのかなと、そう思ったところでございます。大変生意気事を言いましたけれども、なかなか参加しづらい子どもたちにどうすれば参加してもらえるかを考えたとき、たまたま昔やっていたことを今の子どもたちの話を聞いて思い出したところです。

これまで２回にわたる会議の中で、皆様から本当に、まさにすばらしい課題、

また、それに対する御提案を賜りました。今後、いただいた御提案等は事務局に整理させ、県の対応の方向性を検討させたいと思います。

第３回会議においては、それに対してさらなる御意見をいただいた上で、「未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて」という今年度のテーマについてまとめていただきたいと思います。

本当に私たちの取組が子どもたちに少しでも伝わったらいいなと願いつつ、ずっと話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

４　閉会

〇小倉総務部長　　ありがとうございました。それでは、以上で本日の次第は全て終了させていただきます。ありがとうございました。